

論文

勝ち組、負け組抗争を通じたブラジル 日本人移民の心性の変遷について

— 新しい精神の形成を求めて —

諏訪 三男*

序文

人の一生を考える時、生まれた国において平凡な穏やかな暮らしの中に幸福を見出す人が大多数とすれば、与えられた境遇に見切りをつけて新天地に乗り出し、果敢に自分の人生を—それも海外に求める人—はある意味少数派かもしれない。然し、個人的理由であれ、経済的事由であれ、現実に故国を飛び出し海外に移住する人の国際移動は、経済のグローバル化とともに今後とも続くと思われる。

そういう個人と出身国＝祖国との関わりはどうあるべきなのか、また祖国が果たす役割はどうであるべきなのか、そして移民と受け入れ国との関係はどうあるべきなのか、これらの問いに対して今現在、明確な答えを用意する事はできない。その解を求める為に過去の実例を辿る事が、今後の方策を立てる意味で何らかの示唆を得る一助になるのではないかと、言うのが本論文作成の狙いである。

その題材としては、ブラジル在住の日本人の精神変遷につき取り上げ、人が移動する意味と背景、個人と祖国との関わり方、国家（祖国）

の役割、受け入れ国との関係、それを通じた移民の新しい生き方などにつきスポットを当てて考察したい、と考える。

まず何故ブラジル在住の日本人を題材として取り上げるのかと言うことであるが、筆者が修士課程からブラジル移民研究をしてきた事もあるが、ブラジルに在住する日系人がいまや約120万人にも上り、日本の海外移民勢力としてはメジャーであり、かつ本論で取り上げる第二次世界大戦後の勝ち組、負け組抗争を通じて移民の精神史の劇的な変化を考察するのに格好な材料があったから、と言える。

そもそも人は何故移動するのであろうか。日々の単調な日常生活にアクセントを付ける意味で旅行に出かける人は多い。然しそれは日常生活を基盤として日常生活にリフレッシュする意味で生活基盤の地を離れるものであり、年単位の移動にはならないのが通常である。本論文で扱うのは、そうした日常生活に息吹を与える、精々1ヶ月やそらの移動ではなく、国境を越えて最低でも年単位でその生活基盤を移す、いわゆる移民と呼ばれる人たちの精神生活の変遷を論述するものである。

* 早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程3年（指導教員 池田雅之）

住み慣れた故国を離れて海外の地に暮らすとはどういう事なのか。単に経済的な事由のみに焦点を当てて論述するだけで良いのか。移民の精神性の変遷、文化的なものへの希求にまで触れて移民を語る必要があるのではないか、というのが筆者の観点である。

その洞察を通じて冒頭に掲げた諸点、移民と国家（故国）、受け入れ国との関係の在りかた等についても何がしかの考察のヒントを掴む事ができるのではないかと、という事が筆者の期待にある。

第1章 勝ち組、負け組抗争に先立つ時代背景

本稿の主題である「勝ち組、負け組抗争」に入る前にその事件を生起せしめた時代背景から説き起こす事としたい。

第1節 初期移民にとっての日本像

1908年笠戸丸に乗船してブラジルのサントスに降り立った人たちはどのような職種の人たちであったろうか？「純粋な農民は小学校の教師や役場助役、警官などが多く必ずしも農業携わった人ばかりではなかった」（藤崎康夫編『日本人移民3中南米』第3章、1997年、日本図書センタ刊、P181）と言われる。それゆえ彼等の大半が、単なる農民像というよりも一攫千金を夢見る、いわゆる一旗組が主流であったと言えるのではないだろうか。

すなわち2～3年間の短期でブラジルにて苦役に耐えながらも財をなして錦衣帰郷を期待する人が多数で、ブラジルにじっくり根を下ろし自分の家族と子孫に安住の地を見出す、という考えを持った人が少なかったものと思われる。

然しながら彼等の精神生活を見る時に、前山隆（注1）がその著『エスニシティと日本人』（1996年、お茶の水書房刊）で言うように、初期移民が、「仏や墓は日本に置いて来た」と故国日本への紐帯をきれいさっぱり切り離してきた人たちだと割り切って考えるのが果たして正しいのであろうか疑問に思うところである。それよりも私にはむしろ、ブラジルにあって心は常に日本と結びついている、国際社会学の現下の用語で言うところの離散ディアスポラ、長距離ナショナリズム（注2）に近い心象の持ち主であったのではないかと、という気がする。何故なら朝晩農作業に出る前の皇居の方角に向かっての逍遥、天皇陛下の肖像額の設置と拝礼、日本人子弟への大和魂の注入伝達と継承に彼等移民が忠実であった事を思う時、故国への精神的な結びつきが固く、絆を保ち続けていた人たちが故国との紐帯をつなぐ要素のひとつである「仏や墓は日本に置いてきた」とは、どうしても考えられないからである。

第2節 日本の移民、植民政策

一方、1900年代から1945年まで、いわゆる戦前の日本政府による移民、植民政策はどうであったろうか。満州（中国東北部）を例とした日本の勢力範囲内の地への移民－これは日本の軍部に庇護された上での開拓移民、いわゆる帝国主義下での植民地への「植民」と日本政府の勢力範囲外であった地であるブラジルへの「移民」とは同列には論じられないかもしれない。然しながら満州への植民とブラジルへの移民を対比して考える事は国家とは何かを考える上で大きな尺度となろう。

（1）満州については日本の政治、経済、軍事支

配下に置こうと明白に行動してきたわけであるが、ブラジルに対してはどうであったろうか。地理的な遠さを考えればブラジルを日本の勢力下に置こうと考えるのは常識外かもしれない。然しパナマ運河近辺まで日本の潜水艦を出動させた事（注3）もあり、あながち全く考えなかったわけではないのか、という疑念が残る。

- (2) 事実これに呼応する形で、第二次世界大戦中にブラジルの議会において「日本はアマゾンに占領してそこから反米作戦を企てている」と言う論議が真面目になされ、それが1930年代半ばのヴァルガス政権時に施行されたブラジル化（Brasildade）政策（注4）と無縁だとは言えない、との見方もある。

ブラジル移民資料館ブラジル日本移民百年史資料編纂委員会編『ブラジル移民の百年』、2008年、風響社刊、第5章ナショナリズムの昂揚と日本人移民の排斥によれば、

「-----1933年（昭和8年）4月8日東京発のUP電としてリオ・ジャネイロのポルトガル語紙が、『日本の軍部がブラジル行き移民を満州に振り変えようとしている』と報ずると、ブラジルの親日家でさえ、『日本は満州の為にブラジルを袖にしようとしている』との不快感を表す一方、排日家は、それまでのブラジルへの移民数の多さに対して『日本がブラジルに多数の移民を送り込む背景にはブラジルへの侵略的意図がある』との警戒感を強めた」とある。（注5）

かくしてブラジルにおける排日論が高まって

いったのである。これはとりもなおさずブラジル側の杞憂に終わる結果となったが、当時の日本政府の出先機関である在ブラジル領事館がもっと当時の国際関係に敏感な嗅覚を持ち対応にあたっておけば、その後に見られた一方的な日本人排斥にはつながらなかったであろうと思うと誠に残念な局面であったと言える。

第3節 ヴァルガス政権における排日運動の動き

ブラジルにおけるヴァルガス政権における排日運動の動きに関する記述が前掲の『ブラジル移民の百年』第5章二分制限法の成立にある。それによれば、「1933年（昭和8）年11月30日以降、憲法制定会議の委員会で連邦新憲法案の審議が始まると人種による移民制限規定、実質的には日本移民制限規定を挿入する修正4案が提出された。その提案理由としては以下の3点が挙げられた。

①日本移民に同化性がない事 ②人種構成上アジアおよびアフリカ系の混入が望ましくない事③ブラジルの満州化の危険がある事

この法案に対しては賛否両論あったが、最終的には1934年（昭和9年）5月24日に、排日派のミゲル・コート（Miguel de Oliveira Couto）教授（注6）の提出による通称、移民二分制限法：1884年から1933年までの50年間の移民数の2%に1934年以降の移民数は制限するという修正条項が本会議で可決された。」とある。

これにより日本の移民数は過去50年間の定着数142,457人を母数にし、その2%の2,849人を1984年以降より受け入れることになったのである。

他方、日本語教育に対する制限に関しても、「1938年5月4日には農村地域の学校において14歳以下の学童への校内での学校教育を禁じ、教師もブラジル生まれのブラジル人に限定する外国人入国法（Decreto -Lei N. 406. Dispõe sobre entrada de estrangeiros no território nacional）が制定され、同年12月21日から施行された。これにより農村地帯（連邦府・州の首府および外国人入国港以外の地域。サンパウロ州ならばサンパウロ市とサントス市以外の地域）での日本語学校は閉鎖を余儀無くされた。」のである。（前掲、第『ブラジル移民の百年』5章、日語学校の閉鎖）

一方、当時の満州に植民に赴いた人たちの事を省みるならば、彼等が日本精神を体现していた人たちであったとは必ずしも言えないのではないかと考えられる。彼等は関東軍を始めとした日本の勢力範囲の権益に守られながら、考えられない低利で満州農民の土地を（買い上げた形をとっていても実際は）収奪して俄か地主になったものが多く、そうした人々が純粋な意味で真面目で、誠実で、正直な日本精神を継承してきた人と言えるのかどうか、甚だ疑問を感じざるを得ない。私には満州への日本移民＝植民は、日本の帝国主義に庇護された横暴と我儘に満たされた一団と言う見方のほうが妥当なように思われる。それに対し、日本政府の庇護が充分に及ばないブラジルの地にこそ、純粋に故国を思い、日本人である事、日本精神の堅持、継承への努力、先祖への思い等祖国日本への紐帯を絶やさないように努めていた一団ではなかったかと思われる。そういう一団は、日本の勢力の及ばなかった国への移民—南北アメリカと

りわけ当時一番情報が入りにくかったブラジルに移住した日本人にこそ典型的に表れていたのではないかと推察する次第である。

それではブラジルへの移民はどのように進展していったのであろうか。

日本政府は、1925年には渡航移民の船賃と移民会社への手数料（35円）の全額日本政府による支給決定をした。これを受けて公的機関（主として県が中心）による農地の確保が為されたのである。

前掲『日本人移民 3 中南米』によれば『笠戸丸による初期移民の後、日本人移民は、1920年から1930年にかけてコーヒー農園で働き、苦役の中サンパウロやリオと言った大都市に逃避するものが後を絶たなかったが、その後日本の各県がブラジルの農地を買い上げそこに各県の出身者を小地主として耕作させる土地割り当て制度—いわゆるコンセッソン（Consessão）制を実施した。この制度がその後ブラジル各地での産業組合の発展に繋がり、ブラジルにおける日本人移民による農業分野で基盤確立に寄与したのである』とある。（注7）

何故このコンセッソン制が日本政府（国家）ではなく、県が中心となって推進されたのか疑問であるが、これがブラジルにおける日本人に今も残る県人会への帰属意識に繋がっているのは確かである。

しかしこのコンセッション契約も暗礁に乗り上げる事態となった。前掲の『移民の100年』第5章によれば、コンセッション契約につき以下の記述がある。「新憲法第130条により1 ha 以上の土地のコンセッソン契約は都道府県議会と議会の許可を要す事項となり、1936年（昭和11年）

3月、アマゾン州により、アマゾン産業研究所との間のコンセッション契約が上院に提出された。丁度その頃から訪日団体のトレス協会により黄禍論によるコンセッション反対運動が開始されていたところで、ポルトガル語誌には『日本がパナマ運河を伺い、アマゾンに日本海軍の根拠地にしようと考えていた』と言うセンセーショナルな排日記事が掲載された。賛否両論あったが、結局同年8月に国防的見地から州政府の申請は却下され、コンセッション契約はブラジル連邦政府により否認されたのである」とある。

第2章 勝ち組、負け組抗争における日本人の心層の変化

第1章にあるような時代背景を背負いながら第二次世界大戦の敗戦を迎えたわけである。

第1節 第二次世界大戦における日本の敗戦

日清、日露、第一次世界大戦と、日本は過去の戦争に勝利し、アジアの盟主として君臨してきた。そこには「神国日本」と言う概念－日本が戦争に負ける事などない－という信仰に近い信念が当時の日本人の精神の根底にあったものと思われる。そうした中での日本の敗戦である。自分の身を守ってくれるはずの日本政府領事館員や移民会社の社員たちはブラジルとの国交断絶が決定するや否や、即座に踵を返すように自国の民を置き去りにして帰国してしまったと言う。この時多くの日本人移民の心にはボカーンとした虚ろな思いが去来し、「自分たちはもしかすると「移民」ではなく「棄民」だったのではないか」という思いに駆られたのではないかと思う。

第1章で見てきたようなブラジルからの種々の迫害に耐えてきたのは、日本が戦争に勝利し、ブラジル社会からの抑圧を解放してくれる日が来るのを待ちわび、サントスの海辺彼方に「天皇が遣わされた日本人を迎える船の到着」をひたすら待っていたのである。

然しながら、現実には日本の降伏により第二次世界大戦は終結した。1945年8月16日、終戦を知らせる報が、各地の日本人植民地にも届いたが、もはや統制機関を失っていたブラジルの日本人社会は終戦の報せとともに、精神の安定を欠き、日本人同士で「勝ち組」、「負け組」抗争へと突入していくのである。

第2節 敗戦に対する受けとめ方の二極化

結論を先取りすれば、勝ち組も負け組も同じ結論を持っていた、と言えよう。つまり日本は第二次世界大戦に負けたという事実である。勝ち組がこの真実を知らなかったわけではない、否むしろ知りたくなかった、信じたくなかったというのが本音ではなかろうか。それをことさら種々の会合で声高に日本の敗戦を述べる在ブラジル日本人が彼らには許されなかったのである。日本の敗戦は、勝ち組の論理からすれば、『誰が言わなくとも自然に広まりわかるもの』であり、ことさらに『人様に喧伝するものではない』ことであったのである。

勝ち組、負け組抗争が奇妙な色彩を帯びて語られてきたのは、この抗争を固陋な敢闘精神やら神国不滅の思想を結びつけたからであると言えよう。

この間の事情は外山 脩氏の『ブラジル日系社会 百年の水流』（2006年12月トッパン・プレス印刷出版有限会社刊）第5章から第9章に

詳しいが、巷間「日本の戦勝を狂信する会員10万人以上を擁する秘密結社－臣道連盟が、その特別組織である特攻隊を使って敗戦運動の指導者の暗殺を図った」と伝えられるが、外山氏がその実行犯であった古老とのインタビューを通じて、負け組幹部への刺殺を①臣道連盟とは一切関係のない事件と語ったという事実 ②『特攻隊では特行隊である』であった事。加えて敗戦論者の皇室の尊厳を犯し、国体を侮辱する言動にカチンときて「コロニアの指導者に反省を求めるために-----やむを得ず一度だけ過激な行動に走る-----そんな気分だった」との事実が外山氏の調査で判明している。

要約すれば、勝ち組も負け組も深層では同じ気持ちを持っていたのであろうと思われる。

第3節 勝ち組、負け組抗争について

第1項 この抗争の発端は何か

それではそもそも勝ち組、負け組抗争の発端は何であったのか。それを考える前にまず勝ち組、負け組という用語の定義をしたい。勝ち組とは、日本が第二次世界大戦において敗北したことを信ぜずに勝利したものと信じたグループである。一方負け組とは日本の敗戦を認識し、それを認めようとしたグループである、と言える。

この抗争の発端は、Fernado Morais 著作の『Corações Suyos』（邦訳：『汚された魂』）（注8）に詳しいが、1947年の新しい年を迎えて日本の国旗を掲げて祝っていたTupã（ツパーン）と言うサンパウロ州の地方都市に住む、とある農家にブラジル人官憲が乗り込み、靴底を日本の国旗で拭いた侮辱行為に対し怒りを覚えた日本人青年7人がその官憲の首領を殺戮した話にあ

る。彼等7人はTupã市の英雄と称えられ、その行為を正当視する風潮が日本人の中にあった。

官憲からすれば、日本は敗戦国であり、日本の国旗を飾るなどはヴァルガス政権傘下では許されないと言う主張であったろうが、如何に敗戦国と言えども国の象徴であり、誇りである国旗で靴底を拭くという行為が許されて良いとは誰しも思わないであろう。然しそうだからと言って、官憲を殺戮するというのも行き過ぎの感がするのも事実である。然しそういう事をせざるを得なかった時代背景、精神に我々は着目する必要がある。

第2項 臣道連盟とは何か

そもそも臣道連盟（略称「臣連」）の設立目的は、①戦争時の混乱の中、心の支柱を失った人々に日本人としての誇りを再生させる事 および ②故国である日本への帰還運動の促進にあった。臣連の連盟員数は、1945年8月時点で約3万人居たと推定される。当時のコロニアにおける日本人が30万人とすればほぼ1/10であり、会員の家族を含めると10万人の大規模な団体であったと言える。この人数規模は明らかに秘密結社の枠を越えており、彼等が組織的なテロ集団であった、という俗説に根拠はない。これまでの説は、「日本の戦勝を狂信する臣道連盟が、その連盟員からなる“特攻隊”を使って、中央、地方の認識派（負け組）を次々と襲撃した」と言う事である。然しこれは、事実とは異なる。まず第一に“特攻隊”ではなく“特行隊”であり、フルネームは“特別行動隊”である。これは繰り返しになるが“特行隊”と日の丸に自分が墨書したという証人に前述の外山氏がイ

インタビューした事実があり、明白な客観的な事実となっている。また臣連内部組織にも特攻隊なる組織は見られない。

第3項 この抗争を利用したものは何か

なぜこのように臣連がテロ行為の犯人に仕立てられたのであろうか。

まず第一に臣道連盟の前身の秘密結社である興道社の創立者だったのが元陸軍大佐であった脇山甚作であり、その退役軍人という経歴から過激な軍事的行動を連想させられたのでないかという推測がある。然しその事よりもこれは戦勝国のブラジルが敗戦国への戒めとして規模の大きな日本人団体を利用した治安維持対策と見たほうが妥当と思われる。

日本民族間のテロ事件を臣道連盟の仕業と決めつけたのは、ブラジルの憲兵隊と呼ばれるDOPSである。なぜDOPSは臣道連盟の仕業と決めつけたのであろうか。

前述の通り、当時臣道連盟の総連盟員数が10万人を数えたという。同じ敗戦国であるドイツ、イタリアにおいてかかる弾圧が見られなかったことから、これは戦勝国が敗戦国に見舞った見せしめと国威発揚の2点にしか目的が感じられないのである。

かかる意味でブラジルは、用心すべき国であったかもしれない。然し当時のブラジルが実際はアメリカに言いなりにならざるを得ない国際情勢に巻き込まれており、ブラジルからの発想（注9）というよりも、アメリカにそうするように仕向けられた局面もあるからである。

第4項 この抗争の本質と教訓

この抗争弾圧によってブラジル側が得たものは何であろうか。どう思い巡らしても殆どなかったであろうと思われる。

それでは日本、日本人はこの抗争により何を得たのであろうか。これはある意味で瓢箪から駒とも言える、実りある副産物をもたらしたとも言えよう。

それは第2章第1.2項とも関連するがブラジル在住の日本人が、戦時中の外地における自国民保護の在り方および国家と国民の関係を強く意識化した事であろう。

即ち、第二次世界大戦の敗戦を通じてブラジル在住日本人は以下の5点を強く感じたのではないかと思う。

- ① 国（祖国）は頼りにならないものであるとの認識。
- ② 移民国で自立して生きていくことの重要性
そのためには子弟の教育（それも日本式ではなく移民国に根を下ろす視点での）教育が重要である事
- ③ ①、②を通じたブラジル社会での立場の止揚を諮る事
- ④ ブラジルに根を下ろしながらも故国との紐帯を深める可能性を模索する事

1941年（昭和16年）12月に日本は第二次世界大戦に突入した。翌年リオに抑留交換船が来航し南米各地に居た日本の外交官、民間人計300人が乗船した。ブラジルからの乗船者は、石射大使、原馨サンパウロ総領事始め大使館、総領事館、領事館（バウルー、サントス、クリチバ、

ベレン)の館員、ブラ拓の職員、海興、東山、商社の社員、新聞記者などであり、一般の日本人移民とその子供は含まれていなかった。つまり日本人移民は日本国政府に取り残された、のである。このパターンはその後3年を経た満州でも同じ形体が繰り返されたのを想起する人は多いだろう。満州開拓民を保護すべき関東軍、政府関係者がいち早く満州から帰還し、多くの残留孤児を残したパターンと恐ろしく類似しているのに我々は驚かされる。つまり日本国政府による非常時における棄民化政策は悲しいお家芸であるとも言える。

このような状況下で日本人移民のメンタリティーはどのように変化していったであろうか。あらためて考えて見たい。祖国に強く結ばれていた人々が一夜明けると異国の地に取り残されてしまった、と言う現実と直面し、最初にブラジルに暮らす日本人移民の心に最初に去来したものは諦念というか虚脱感であったろう。その後暫くしてこのままではどうにもならない。故国が信用できないもののだとしたら自分たちの足で頭で手でこのブラジルの大地に立ち向かうしかないと思ったのではないか、と思われる。従い日本人移民はその子弟に対し、しっかりしたポルトガル語による教育を受けさせる必要性和それを通じたブラジル社会での社会的な止揚をめざしたのだと思う。

しかしだからと言ってそういった心の変遷を得た日本人移民が故国との紐帯を全く消し去ったかというところとは言えない。天皇に対する崇拝性は日本に住む一般人のそれと比べてむしろ高いのではないかと推測される。それは地理的な遠さに依る要素かもしれないがやはり基本

的に保守的な移民たちがその子孫にも残してきた民族的なDNAの継承だと言えなくもない。またそれはある意味で遠距離ナショナリズム、流浪ディアスポラとしての故国への発露として当然な姿なのかもしれない。

第二次世界大戦前から敗戦を経て新たに立ち上がったブラジルの日本人精神の変遷を図示すると以下になる。

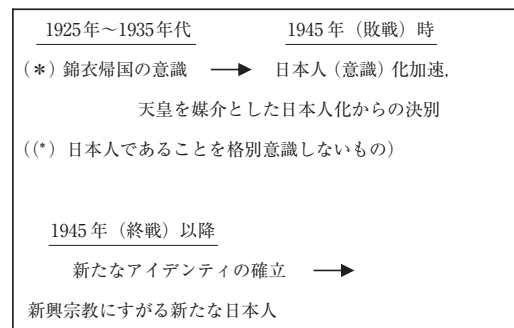


図1 ブラジルにおける日本移民の精神性の変遷
(筆者による作成図)

いずれにしても地殻変動というべき第二次世界大戦での日本の敗戦、またそれに伴うブラジルの日本人の精神性の変遷という洗礼を受けたことがどちらかと言うと閉鎖的社会の中で純粋培養されていた種子が大きくブラジルという自然界の中で花開くために必要不可欠な試練であったものと、受けとめられて然るべきものと考えてる。

第3章 内地日本人の戦後の復興精神

敗戦時における内地日本人の心性の変化にも目を配る必要がある。それはブラジル在住日本人の精神性を比較する為である。

第1節 戦後の虚脱感と戦時中の淀んだ意識

第二次世界大戦の敗戦を受けとめた内地にお

ける日本人の精神性に目を転じてみよう。アメリカの歴史学者であるジョン・ダワー氏（注10）の著作『増補版敗北を抱きしめて（上）』（2004年、岩波書店）によれば、（内地に住む）日本人の敗戦時の心理状態を以下のように記述している。敗戦時の日本人の虚脱感を優れて示していると思われるのでいささか長い引用となるが以下記述する。（P92、4行目から12行目まで）

「このように憔悴しきっていた多くの日本人にとって、「解放」とは、当座のところ政治的というよりは、むしろ心理的な意味をもっていた。降伏とは、連合国の勝利、あるいは米軍による占領を連想させたが、同時に日本人にとって降伏とは、死からの解放を意味した。それまで日本人は、ひと月、そしてもうひと月と、最悪の事態に備えつづけていた。そして突如、その緊張の糸が切れたのであった。ほとんど文字どおり、日本人は生命をもう一度与えられたのである。天皇の放送を耳にしてショック症状に近い状態になり、そしてその直後に大きな安堵に包まれたという例はごく普通であった。だが、その安堵は一時的なものに過ぎないことも非常に多かった。その後すぐに、疲労と絶望が襲ってきた。こうした精神的な崩壊感とは、非常に深い心理的体験であり、かつ全国的にみられた現象であったので、それまで専門用語としてしか使われたことのなかった「虚脱」という言葉が社会一般でも用いられるようになった。こうして民衆は、「虚脱」状態に陥ったと表現されるようになったのである。」

ブラジルに住む日本人が、アメリカに加担する敵性国の迫害の中で不自由な生活を強いられ

ていたものの、内地の日本人のように死を日常生活で感じていたとは思われない。然しながら、まさか日本が負けるとは、という意識は外地に住んでいる日本人の方が情報の少なさとも相俟ってそのショックは大きいものがあつた、と想像される。疲労と絶望から虚脱感に勝ち組も負け組も襲われていたのは確かである。

私がここで問題にしたいのは「解放」という意識である。「欲しがりません、勝つまでは」の精神は、満州事変が勃発した1933年からじわじわとその後終戦までの12年間に亘り、日本国民を真綿で締め付けるような圧迫感を与え続けてきたものと思われる。これは一方で祖国の非常時に何もできない、参画できなかったという心理的な圧迫に苛まれ大東亜共栄圏への帰還運動も発生したくらいであったブラジルの日本人社会においても同様の思いであったと思われる。それが敗戦と言う日を境に爆裂したのである。

第2節 戦後の内地の解放文化

またジョン・ダワー氏によれば、戦後の日本の解放文化は次の3つになると言われる。一つ目は、性の解放文化、二つ目は闇市文化、三つ目はカストリ文化である。

一つ目は占領国であるアメリカ兵士の性に対する欲望を処理し、日本の婦女子の純潔を守る為に慰安所が設けられ、日本人一般のそれまで抑圧された性に対し、人間性の一部としてそれを認め、種々の雑誌、映画、文芸の分野での性の解放文化が開かれた。その二つ目は闇市文化である。食うか食われるか、生き馬の眼を射るような、生きる為の生活、そこには「武士はく

わねど高楊枝」と言った清貧文化と真っ向から対峙するような文化があり、日本人云々の前に人間としての生の生き様を知らしめる精神生活がそこにあるものを認識せざるを得ないものと思われる。

最後にカストリ文化である。カストリ文化はカストリ焼酎に由来するもので、倒錯と虚無的態度を礼賛する画家や作家が特に好んだが、質の悪い酒で、飲み込むには鼻をつまむのが一番いいと言われていた。そこから米兵相手の売春婦や闇商人の世界に似合いの無秩序なサブカルチャーに「カストリ文化」と言う名前がついたのである。

禅や、わび、さびと言った高尚な文化も日本文化である事は否定するものでは当然ないが、それに並行する形で人間の反体制精神に根ざした文化が花開いた事実到我々は目をそむけてはならないと思う。

ブラジル在住の日本人社会には占領軍も来なかったし、都市を空爆された戦後の悲惨さとは無縁であったからそうした三つの文化に影響を直接受ける事はなかった。それ故に逆に虚脱感の向う先がある種、殺人、殺略と言ったある種病的な方向に進んだものと推察する事も可能であるが、本問題については専門的な心理学的側面に関する要素が多いのでここでは深入りしない事とする。

結言ーブラジルの日本人の新しい生き方の創設

第2章、第4項で、筆者は、祖国は頼りにならないものという記述をした。更に考えてみれば戦時中の国体護持が苛酷なまでに日本国民の精神を蝕んできた事実を省みる時に明治時代以

来の国体、その重みからの脱却を目指す、自由な精神性への変貌を内地の日本人同様、ブラジルの日本人移民も覚醒したのではないかと思われる。

また更には外国に暮らしながらも故国の事を忘れない、長距離ディアスポラ、遠隔地ディアスポラといった形態でも故国を思うことが可能である、と思い立ち、また天皇に代わる新たな精神的支柱を形成するため、ブラジルに進出している生長の家、とか金光教等の新興宗教にすがるにブラジル在住の日本人も多く見られた。

いずれにしても「解放」から「虚無感」を経て新たな生き方を切り開き、日系ブラジル人は再度歩みを進め今日ブラジル社会において信頼を置かれ確保たる地歩を築きあげてきたのは疑いのない事実であり、その数奇な精神性の変遷過程には驚きを感じ得ないのであるが、その地歩を築く歩みの背後には、ブラジル在住日本人の心性に大きな変化があった事を我々は忘れてはならない、とあらためて感じる次第である。それは内地の日本人が戦後驚くべき復活力で日本を経済大国に築きあげた精神的な強さとどこか深いところで結び合っているものと思われる。

〔投稿受理日2010.5.22／掲載決定日2010.6.10〕

＝主要参考文献＝

- ・『移民の回帰運動』（前山隆著、1982年、NHKブックス）
- ・『ブラジル日系社会ー百年の水流』（外山脩著、2006年トッパンプレス印刷出版）
- ・『エスニシティとブラジル日系人』（前山隆著、1996年、御茶の水房）
- ・『日系人とグローバリゼーション』（移民研究会編、

2006年人文書院)

- ・『日系ブラジル移民史』(高橋幸春著, 1993年, 三一書房)
- 『ブラジル移民の100年』(ブラジル移民資料館ブラジル日本移民百周年記念編纂委員会著, 2008年, 風響社刊)
- 『日本人移民』3中南米(藤崎康夫編, 1997年, 日本図書センタ刊)

注釈一覧

- (注1) 前山隆: 前静岡大学教授。ブラジル移住の日本人の生活・社会行動に人類学的視点を織り込み分析した先駆的学者でその功績は高く評価されるべきであろう。
- (注2) 離散ディアスポラ, 長距離ディアスポラ: ベネディクト・アンダーソンは長距離ナショナリズムを以下に定義する。
『移住した海外で独自のコミュニティを維持するばかりか出身地である国民国家の内部政治に移住地から関わり続け、祖国に居住していた時点よりも強くナショナルな感情とコミットメントを示す現象』現代のITの発達がこれを加速させている。
- (注3) この話は『パナマから消えた日本人』(山本厚子著, 1991年, 山手書房新社)に詳しい。
- (注4) エスニックな日本人の地域共同体はブラジル社会のキスト(脳腫)と見なされ「日本人は硫黄のように不溶解である」と非難を浴び、ブラジル人としての国民意識を昂揚させ愛国心の浸透を諮ったブラジル化政策を、ブラジルダーデ政策と言う。
- (注5) 『伯刺西爾時報』昭和9年1月24日付け記事に掲載された記事に基づく。
- (注6) 排日派の急先鋒、持論の優生学より主張する日本移民不可論を移民修正案として議会に提出したりした。ミゲル・コウト氏は、1930年代にブラジル医学学士院長でありかつ国会議員であった。彼は単なる排日論者ではなく、日本文化の良き理解者であり、日本の大衆教育を高く評価した故に早晩ブラジルが日本に占拠されるのではないか、というナショナリズムの危惧から排日を推進した、という説がある。
- (注7) この箇所は、外山脩著『ブラジル日系社会ー百年の水流』2008年、トッパン印刷有限会社刊)
- P146に詳しい。なお同書は、日系人が長らく望んでいた本格的な移民通史。ジャーナリストらしく事実認定にあたっては努めて現場調査主義に徹していて、単なる風説書とは異なる核心に迫る迫力が同書には随所に感じられる。
- (注8) もはや日系人のみならず広くブラジル人に読まれているポピュラーな著作。
本書にて著者のモラエス氏は、最も権威のあるジャブチ賞の2001年度のルボルタージュ部門第1位に輝いた。この本によって初めて勝ち組、負け組抗争を知ったという日系2, 3, 4世といった後継世代に認知された、といっても過言ではない。
- (注9) ヴェルガス政権は米国の資本と技術援助にてリオ公害にCSNという高炉一貫製鉄所を建設したりして第二次世界大戦勃発前からアメリカとの関係を深めていた。ヴェルガス個人としては排日推進派ではなかったが、米国の手前、日本迫害を行なったと言われる。
- (注10) 米国の歴史研究家(1938年生まれ)現在、マサチューセッツ工科大学教授。
戦後日本の研究、とりわけ吉田茂元首相研究の第一人者。